‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις· ὁ βίος, ὑπόληψις.’

27号 1991.3.22
文・編集・発行
恋怪子

LIVE：ジムノペディア 1991.3.6 新宿ロフト

ジムノペディアに出来のよくないライブってあるのだろうか？ありそうもないなァ。ライブのあとそう感じた。去年の4月22日パワーステーションに、ティラノザウルスのでるイベント「BAND FRONT LIVE」を見にいって、はじめてジムノペディアを見てそれがとてもよくて5月9日に新宿ロフトにききにいって以来。去年見たときは毒と華でいっぱいのロックンロールに、ヴォーカル兼ギターの人の、子どものもっている不可解さ、奇怪さとその持っている血の匂いのようなものを感じた。

この日も、やっぱり毒と華でいっぱいのロックンロールなんだけど、子どもの不可解さ奇怪さも女の血の匂いも全くなくなっていて、「男になってる」って感じだった。少年→男じゃなくて、少女→女→男という変化もあるらしい。

ジムノペディアは、ヴォーカル兼ギターの人、ベースの人、ドラムの人、3人ともステージで完璧に音楽の中にいる。3人から私に流ってくるのは完璧に音楽だけ。音楽を通して、あの3人があの音楽の中にいる姿しか見えなかった。3人の個人的な感情とか、ひととなりとか、生活とか、なーんにも見えてこなかったし感じることもなかった。完璧。

私たちが生活の中でしゃべっていることば、それはどれひとつとして個人的でないものはない。すべてしゃべっている私たちの、個人的感情、個人的ひととなり、個人的生活にまみれている。ジムノペディアのヴォーカルの人の歌っている歌詞には、そういうものにまみれているところがない。歌詞が完璧に普遍化された詩になっている。だから歌詞が、まさしく個人的なものの極みであるリズムにひびいてくるのではなくて、あの演奏の疾走で神経中枢に走ってくる。

私たちが生活の中でしゃべっていることばから、まみれているものをとり去って「個人」から「人間」を抽出するのが哲学であるともいえるだろうし、個人的なことばから、まみれているものをとり去って、「ことば」から「詩」を抽出するのが詩であるともいえるだろう。そうだとするとジムノペディアをきくということは、哲学の本か詩集を読むようなことなのかもしれない。でもその本はジムノペディアが書いたんじゃなくて、ジムノペディアをきいて自分で書くのだ。ジムノペディアが完璧に音楽の中にいるから、それができる。自分で書ききって、自分で読みきって。いい気分！

ジムノペディアのライブ：3/29 新宿アンティック（ゲスト：LOVE SICK LOVERS, Billy the caps, WAIATA）
4/13 川崎チッタ（オールナイト）　3/30 新宿アンティック（ゲスト：Panic in the BU, Deadly DRIVERS）

LIVE：橋本秀次郎 1991.3.16 新宿シアターPOO

2月16日のシアターPOOのライブでは、ギターの人とキーボードの人がいたのだが、この日は1人でギターを弾きながら歌った。最後にやった「王様とおいら」はギターもなしに歌った。ギターを弾きながらだと歌に集中できないといって、足で拍子をとりながら歌った。はじめは目を閉じてきいた。じにしみいってきた。2曲目の「天国の扉」で8月の暑さのなかの凍えるじを歌ったが、それを実感した。暑さのなかで凍えるじを。3曲目の「イサミさん」すばらしかった。いままで何回かきいた「イサミさん」は「イサミさんは今日もガードレールをバンバンたたいているはずだぜ」というのであったが、この日は「今日もガードレールをバンバンたたいてくれてるはずだぜ」と歌った。その心の意味がわかった。この日の橋本秀次郎は、詩を歌っていた。この日にやった弾き語りの筒井直裕にしても、龍太郎にしても、ベースとギターの入った後藤文彦にしても、みんな詩ではない。現実生活で話されることばのレベル、ただのおしゃべりにしかすぎないものだった。ステージでギターを弾きながらおしゃべりをしているだけ。龍太郎は「はしゃぎすぎたガキども」という歌で高校生のときのことを歌ったが、あれならハンバーガーショップで高校生たちのおしゃべりをきいた方がましだ。現実のおしゃべりなら、つじつまも合っていないしまとまってもいないから。

橋本秀次郎は希有な詩人だと思う。いや、詩人というものが、そもそも希有な存在なのだ。萩原朔太郎は「月に吠える」の序でこう書いている。

「私の詩の読者にのぞむ所は、詩の表面に表われた概念や『ことがら』ではなくして、内部の核心である感情そのものに感触してもらいたいことである。私の心の『かなしみ』『よろこび』『さびしみ』『おそれ』その他言葉や文章では言ひ現はしがたい複雑した特殊の感情を、私は自分の詩のリズムによって表現する。併しリズムは説明ではない。リズムは以心伝心である。そのリズムを無言で感知することのできる人とのみ、私は手をとって語り合ふことができる」

読者である私は、「『ことがら』ではなくして、内部の核心である感情そのもの」を、「言葉や文章では言ひ現はしがたい複雑した特殊の感情」を詩人にのぞむ。そういう詩を詩人にのぞむ。

SCENE：1991.2.24 原宿歩行者天国

原宿の歩行者天国は音楽をきいてじに流れる時間と世の中で流れている時間を同時に感じいるところ。代々木公園正門前にはいつもどこの国の人たちかはわからないが男たちが多勢集まっているし遠くに「すぐに後悔する」と書かれた幕が見える。神宮橋のそばにとめてあるワゴン車のフロントガラスにはアラビア語で書かれた紙がはってあって、なにかの宣伝がされている。その神宮橋の上でFREAKS路上音楽団が静かに音楽をやっていた。メイクもコスチュームも美しく音楽にきき入った。

LIVE：ティラノザウルス 1991.3.15 渋谷ラ・ママ

永井豪の「デビルマン」でデーモンが人間と無差別合体をして、悪魔にもデビルマンにもなりきれず人間と悪魔のふたつのからだが拒絶反応をおこして醜い姿でつぎつぎと死ぬところがある。この日のティラノザウルスはそんなふうだった。音楽という幻の中の幻の人にもなれず、現実生活の中の人間にもなれず、ちっとも美しくなかった。ヴォーカルの人のメイクはいつもより凝っていたのに…。ギターの人だって姿かたちがいつもとちがっていたわけでもないのに…。ちっとも美しくなかった。もーッ！1回目のアンコールがはじまって、椅子にすわったままできいていたら、ぶっとベースの音がこっちに迫ってくるように感じられてきて立ってきはじめた。ベースの人に目がくぎづけになった。視界にはヴォーカルの人もギターの人も入っているし、歌もギターもきこえてるんだけど、目も耳もそっちを向かない。3回目のアンコールはローリングストーンズの「LET'S SPEND THE NIGHT TOGETHER」で、とりわけギターをかきならしているのに、それでも目も耳もそっちを向かない。もーッ！

この日の前の日に「20世紀西洋の絵画展」でシャガールの「出現」という題の絵を見た。キャンバスを前にした画家のそばに大きな翼の天使が現われて画家は驚きの表情で天使を見ている。同じシャガールに「インスピレーション」という題の絵があって、それは河のほとりで絵を描いている画家のそばにやはり翼をもった天使が現われる絵なのだが、その天使とちがって「出現」の天使は屈強なからだの力強い天使。創造の天使。シャガールは自分に絵を描かせる なにか を天使と感じていたのにちがいない。そして、それは出現というふうに来ると感じたのだ。そういう出現がないと表現が表現にならない。どうすれば天使が出現するのかな？

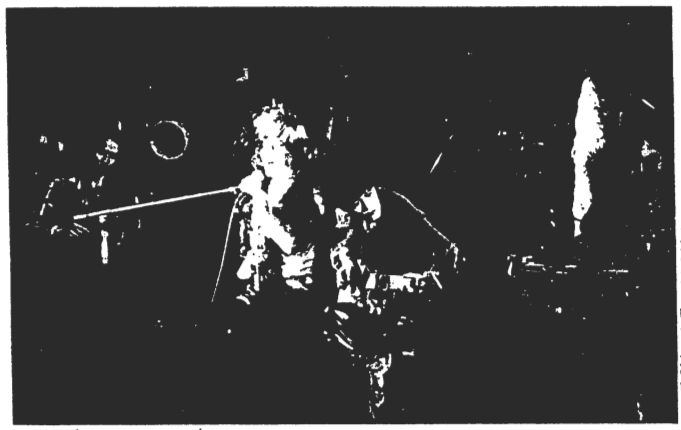

PHOTO BY NOB

ティラノザウルスのライブ：4/15 渋谷ラ・ママ（ワンマン）

LIVE：DISCHARGE 1991.2.22 川崎チッタ

楽にゆたかな音楽だった。前座でやったDEATH SIDEはじめていいと感じた。LIP CREAMの曲もやったけど思うのもうれしかった。

LIVE：ロンドンブーツナイト 1991.3.2 吉祥寺バウスシアター

HARLEM JOKERS。酒と女の歌ばかり。ロックンロールの表層に酒と女の表層がのっかってるだけ。MAGIC CARPET RIDE。前のNOBSのヴォーカルの人がぬけて新しいヴォーカルの人になったんだけど、ありふれた感じでおもしろくなくなった。きかせる歌がない。THE YELLOW MONKEY。いい男がステージにのっかってるのを見るだけなら、なにもライブに行くことはない。そこらを歩いてるよーないい男ってステージの上じゃいい男になんない。ベースの人はカッコよかったけど。DOLLS。やっぱりベースの人だけ、見ごたえききごたえのあるのは。ティラノザウルス。2月15日のラ・ママのときは致死量をこえたって感じだったけど、この日は、まさに適量で、さいしょのさいしょから「いいねェー」っていうふう。ああいうときって心の方が体よりぜったい大きくなってる。最後がゲストのすかんち。三味線江戸蔵がいたときの筋肉少女帯の一滴を大量の水でうすめたみたいで、退屈した。